

上代・中古における動詞を表す「屈」字の意味

——中国古典文献の「屈」字の意味と比較して——

柚 木 靖 史

一 はじめに

「屈」という漢字に、現代の常用漢字としては、動詞としての訓読みは登録されていない。ただし、歴史的には、「かがむ」「かがめる」「まげる」等、動詞としての複数の読み方が存した。また、「屈」は、漢語サ変動詞として「屈(クツ)す」とも読まれた漢字である。ちなみに、『色葉字類抄』¹⁾では、「カ、ム／カ、マル」「オサム」「マク／マカル／マケテ」「クシク」の訓が挙げられ、また、鎌倉時代書写ではあるが、『観智院本類聚名義抄』²⁾には、動詞として「カム／カマル」「ヲサム」「マグ」「クジク」「ウヤマフ」「イタス」「ツキヌ」の読みを掲載する。おそらく、これらの訓は、「屈」の意味によって読み分けられたことを示しているであろう。すなわち、具体的な物を主語としたり、対象としたりして、「曲げる／曲がる」の意味を表す場合には、「マグ／マガル」と読み、勢いのあるものを主語にしたり、対象にしたりした場合には、「クジク」と読んだのであろう。あるいは、腰のような体の一部を主語としたり、対象にしたりした場合には、「カム／カマル」と読んだのであろう。『字統』³⁾の説明によれば、「屈」には、「屈服」の意味があったとされる。この説明に基づけば、「屈服」を意味する「屈」を読んだのが「カム／カマル」であり。「屈服」の心の状態を意味する「屈」を読んだのが、「クジク」であるといえる。いずれにしても、加えられ

た圧力によって、勢いが止まったり、方向が変わえられたりするものが、「屈」字の表す意味であっただろう。同書には、「説文」八下に「尾無きなり。尾に従ひ、出聲」と形声に解するが、字の全体が屈尾の獣の形で、屈服の意を示す。(略) 鳥獸に通じて用いる語である。それより屈辱。屈従・屈曲・屈竭(尺きる)の意に用いるが、ときには屈強のように威力ある姿勢とされることもある」と記され、「屈」に「曲げる」「尽きる」の意味があることを示す。

さて、本稿では、このような意味を表す「屈」という漢字に焦点を当て、中国からの漢字受容という観点から、日本における上代文献の用法から中古文献への用字法の変化、さらには、中国古典文献における「屈」の意味と、日本におけるその意味とを比較し、「屈」という漢字が中国からどのように受容されたのかという点について考察する。さらには、「屈」の字義と、漢語サ変動詞化した「屈す」との関わりについても、触れてみたい。

二 『古事記』『日本書紀』における「屈」

『古事記』^④には、動詞として使用された「屈」は、見られない。『日本書紀』^⑤では、動詞の「屈」は、次に示す2例が存する。

- 1 仍以持劍、三截其弓、還屈其劍、投河水裏、別以刀子刺頸死焉。(崇峻天皇 卷第二十一 ②51頁6行目)
- 2 今汝頓屈先祖之名、必為後世見嗤。(舒明天皇 卷第二十三 ③46頁9行目)

1の「屈」は、国史大系本の当該箇所では、「ヲシマゲ」と読む。本文のテキストとした『新編日本古典文学全集』

(以下、全集と表記する)⁽⁶⁾では、「屈」を「マゲ」と読む。「屈」の動詞単独例で、他動詞用法である。「屈」の主体は捕鳥部方という人物で、対象は剣である。万が、戦いに敗れ、死ぬ直前に、自らの剣を手で折り曲げて、川に投げ込んだという内容である。ここでの「屈」の意味は、「曲げる」である。

2の「屈」は、国史大系本の当該箇所では、「クヂク」と訓む。『全集』では、「屈」を「クジク」と訓読する。「屈」の動詞単独例で、他動詞用法である。「屈」の主体は大仁上毛野君形名という人物で、対象は先祖之名である。戦場から逃げようとする形名に向かつて、妻はその行為は先祖の名を汚すことになると責めるという内容である。1の「屈」は、「曲げる」ものが剣という具体的事物であったのに対して、2の「屈」は、「先祖の名」という抽象的概念である。ここでの「屈」は、「勢いを挫く」という意味で使われている。「屈先祖之名」とは、順調に推移してきた一族の名声を、別の方向、すなわち悪い方向に押し曲げるように、その勢いを挫くという意味となる。このように、「曲げる」と「勢いを挫く」の意味には、共通点が認められる。

なお、「屈」字を含み二字で動詞を表す例は、次のようである。

- 3 先是豊玉姫出来当産時、謂皇孫曰、云云、皇孫不従、豊玉姫大恨曰、不用吾言、令我屈辱。(神代卷第二 ① 186頁4行目)
- 4 天皇久居辺裔、悉知百姓憂苦、恒見枉屈、若納四体溝隍。(顯宗天皇 卷第十五 ① 228頁1行目)
- 5 祝者廼託神語報曰、屈請建邦之神、往救将亡之主、必当国家謚靖、人物乂安。(欽明天皇卷 第十九 ① 438頁3行目)
- 6 経営仏殿於宅東方、安置弥勒石像、屈請三尼、大会設齋。(敏達天皇 第二十 ② 488頁8行目)

7 庚辰、於大寺南庭、嚴仏菩薩像与四天王像、屈請衆僧、讀大雲經等。(皇極天皇 第二十四 ③64頁3行目)

3は、「屈辱」の例である。国史大系本では、当該箇所「屈辱」を「ハヂミス」と訓んでいる。本稿で本文テキストとした全集でも、「屈辱」を「ハヂミス」と訓む。ここでの「屈辱」の主体は豊玉姫で、「恥をかかせた」という意味である。出産の場を見ないように要望したのに、皇孫からその現場を見られ、恥をかかせたという内容である。

「令」とあるから使役表現である。恥をかいたのは豊玉姫で、豊玉姫に恥をかかせたのは皇孫である。

4は「枉屈」の例である。国史大系本では、「枉屈」を「マゲクジカレタル」と読む。テキストとした全集では、「枉屈」を「オウクツ」と字音読する。「見枉屈」とあるように、名詞用法である。

5は「屈請」の例である。国史大系本では、「屈請」を「ツツシミマス」と読む。全集では、「屈請」を「クツセイ」と字音で読む。ただし、ここでの「屈」には、「(腰を)曲げる」という本来の意味が活かされてもいる。「屈請」とは、全集の頭注では、「強く招請すること」とあるが、「腰を曲げて、うやうやしく相手を招く」というのが「屈請」の本来的意味であろう。なお、「屈請」の主体は天皇で、対象は建邦之神である。

6も「屈請」の例である。国史大系本では、「屈請」を「イナス」と読む。全集では、「屈請」を「クツセイ」と字音で読む。「屈請」の主体は蘇我馬子で、対象は尼である。「屈請」の意味は、5の「屈請」と同じである。

7も、「屈請」の例である。国史大系本では、「屈請」で「ススシミマス」の訓を載せる。全集では、「屈請」を「クツセイ」と字音で読む。「屈請」の主体は蘇我大臣で、対象は多くの僧侶である。蘇我大臣が、多くの僧侶をうやうやしい態度で招いて、大雲経などを読ませたという内容である。ここでの「屈請」の意味も先の5や6の例と同じく、「体を曲げて、うやうやしい態度で招く」という意味である。「屈請」の対象は、「神」「尼」「僧侶」といった、信仰

の対象か、もしくは、信仰に携わる人々である。このように、「屈請」の対象に対して、主体は、尊崇の態度を示す。

三 古文書・古記録における「屈」

三―一 他動詞の「屈」

まず、「屈」の他動詞の意味について考える。なお、用例の検索は、東京大学史料編纂所ホームページのデータベース検索を利用した。

- 1 今夜同屈十口僧念仏云々。(小右記 永祚元年四月三日 廣本 172頁)
- 2 右大臣内房周忌法事、於雲林院修之、七僧外屈六十僧、或説云、六十八僧云々、依有無已之僧所加請也。(小右記 長保元年七月二十七日 廣本 53頁)
- 3 早旦天台座主拄光臨、初余徘徊南泉邊、被過、乍立謁聞、更屈客亭、清談次云、(小右記 長和四年五月八日 廣本 23頁)
- 4 屈澄空阿闍梨令齋食。(小右記 長和四年五月一八日 廣本 30頁)
- 5 歸華後屈阿闍梨盛筵、余代令齋食。(小右記 治安三年五月一八日 廣本 165頁)
- 6 屈受範師奉令積□塔品。(小右記 万寿二年三月二九日 廣本 103頁)
- 7 大原野祭十列代仁王講料書写四部經屈五口僧講演、是恒例事也。(小右記 万寿四年二月二九日 廣本 212頁)
- 8 今日於高陽院權大僧都良意修安鎮法、又屈十口僧侶、被転読大般若經、依來十日御渡也。(中右記 寛治六年)

年七月一日
138頁

用例1の「屈」の主体は藤原実資で、対象は六十僧である。ここでの「屈」の意味は、「うやうやしい態度で招く」という意味である。なお、前述したように、この意味にも、「体をかがめる」という意味が含まれている。2の「屈」の主体は藤原実資で、対象は僧である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。3の「屈」の主体は藤原実資で、対象は天台座主である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。藤原実資が、天台座主を客亭に招き入れ、清談したという内容である。4の「屈」の主体は藤原実資で、対象は澄空阿闍梨である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。5の「屈」の主体は藤原実資で、対象は盛算阿闍梨である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。6の「屈」の主体は藤原実資で、対象は受範師である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。7の「屈」の主体は藤原実資で、対象は僧である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。大原野祭で、五人の僧を招いて、講演をさせたという内容である。8の「屈」の主体は藤原実資で、対象は僧である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。高陽院での安鎮法で、僧十人を招き、大般若経を転読させたという内容である。ここでの「屈」の意味も、「うやうやしい態度で招く」という意味である。なお、これら「うやうやしい態度で招く」という意味の「屈」は、「嘸」のように口偏をつけて記されることが多い。この「嘸」は、「コツ」という音を表わし、「うれふ」の意の「嘸」と同形であるが、おそらく古文書の「嘸」は国字であろう。「うやうやしい態度で招く」という行為が、相手に声をかけることから、口偏が付されたのであろう。

9 囁三口僧、於小野宮令輔仁王經。(小右記 正曆四年二月九日 廣本 261頁)

このように、古文書や古記録における他動詞「屈」は、「うやうやしい態度で招く」という意味で、対象は僧侶に限られる。先に述べたように、「体をかがめて僧を招く」ことを表し、「カム」という「屈」の字義が活かしている。ただし、「曲げる」の意味の「屈」の例は、古文書や古記録には見出しがたい。

三―二 自動詞の「屈」

次に、自動詞の「屈」の意味を検討する。

10 連日饗宴、人力多屈坎(小右記 長和二年二月二十五日 廣本 86頁)

11 似前生杲報御病者。至今無為術、心神屈了。(小右記 長和四年閏六月十日 廣本 48頁)

12 今日節会、称物忌之由不參、多是夢想不閑之上、年老精進身已屈也。(小右記 寛仁二年一月一六日 廣本 1頁)

13 今日東宮御読経結願、心神屈、精進氣也、仍不能參人之由以宰相令披露宮邊、(小右記 治安三年五月十九日 廣本 165頁)

14 宮還給之間余心神屈了。(小右記 万寿四年七月二六日 廣本 11頁)

15 廿一年三月廿八日、召博文、理平、文貞於陣頭、問文貞不着省試判之由、文貞屈云、諸人咲也。(小右記 延喜二十一年三月二八日 廣本 273頁)

16 時剋推遷、右大弁有所勞被退出了。予依早參心神屈了。(中右記 嘉保一年九月二十八日 110頁)

17 及深更參内、於宮御方終夜主上令彈箏給。不改東帶祗候。頗屈了。(中右記 嘉保二年二月二日 181頁)

用例10の「屈」の主体は公卿たちである。連日の饗宴で、公卿たちはたいそう疲れて、心が挫かれたという内容である。ここでの「屈」は、「勢いが挫ける」という意味である。「力が加わって曲げられる」という字義が、この「挫く」の意味に活かされているよう。正常な心が押さえつけられ、挫かれた状態を、ここでの「屈」は、表しているのではなからうか。用例11の「屈」の主体は、心神である。眼病を患い、心が挫かれた状態であるという内容である。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」という意味である。「屈」は、病気のために、心が折れ曲がった状態を表している。用例12の「屈」の主体は、身である。年老のため、身が衰弱していて、節会に参加できないという内容である。ここでの主体は、身ではあるが、実際に身が折れ曲がった状態をいうのではなく、心の勢いが挫けていることを表していると思われる。用例13の「屈」の主体は、心神である。心神が挫けた状態であるので、東宮御読経の結願に参加できなかったという内容である。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」という意味である。用例14の「屈」の主体も、13と同じく心神である。宮が帰られてから、心労のために心神が挫けた状態であるという内容である。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」という意味である。用例15の「屈」の主体は、文貞である。実資から、省試判に不着の理由を問われて、文貞が心を挫いて答えたという内容である。皆から、会議への欠席をとがめられ、心が挫けた状態をいうのである。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」という意味である。用例16の「屈」の主体は、藤原宗忠である。政に参議等が遅れたために、待ちくたびれて、疲れて心が挫けた状態であるという内容である。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。用例17の「屈」の主体は宗忠である。夜遅く、堀河天皇の弾箏があり、東帯も改め

ず伺候したので、疲れて心が挫けたという内容である。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。

以上見てきたように、中古の古記録における自動詞「屈」の意味は、「勢いが挫ける」である。主体は全て心である。心が、疲れや病氣、老衰が原因で、正常ではなく、挫けた状態であることを表している。

上代の文献において動詞「屈」は、「(物を) 曲げる」という意味で使用されている例が見られたが、中古の古文書や古記録にはそのような「曲げる」という意味を表す例がなく、「うやうやしい態度で招く」という意味の他動詞と、「(心の) 勢いが挫ける」という意味の自動詞が見られるのみである。中古の古文書や古記録に見られる、これらの二つの意味は、上代文献の「屈」には見出だされなかった。このように、中古の古文書や古記録の動詞「屈」の意味は、上代の「屈」とは違いが認められる。

四 中国文献における「屈」

前節までは、上代から中古にかけて成立した日本文献について見てきたが、この節では、上代や中古の日本文献の表記に影響を及ぼした可能性のある中国文献を対象に、「屈」の意味について検討する。この節で取り上げる『史記』『漢書』『文選』は、日本国現在書目録にその書名が見える。

日本国現在書目は、九世紀末頃成立したとされる、日本で最も古い勅撰漢籍目録である。この目録に掲載されていることは、九世紀末に当該の三文獻が日本に将来されていたことを示す。平安時代の官吏登用制度においては、これらの漢籍が重要視されたと言われており、訓点資料も残存する。『万葉集』における文選の影響も説かれており、中古文学中には「史記」の名も散見される。『源氏物語』で、源氏が夕霧に行った模擬試験も「史記」からの出題であつ

た。

なお、拙稿において、「怨」「恨」を対象に、これら三文献と日本の上代文献の表記とを比較したことがある。⁸⁾そこでは、日本の漢字表記には、中国の歴史書の影響が見られるものと、中国の詩文の影響が見られるものが存した。したがって、ここでも、歴史書の『史記』『漢書』と詩を多く集めた『文選』を取り上げて、考察を進めていくこととする。

四——『史記』の用例から

まず、他動詞の例を挙げる。なお、用例は、「中央研究院 漢籍電子文献」⁹⁾によって検索し、本文は『新釈漢文大系』¹⁰⁾によって確認した。

- 1 径省其辭、則不知而屈之、汎濫博文、則多而久之。(史記八 列伝1 老子韓非列伝第三 66頁4行目)
- 2 乃閉室不出、出其書徧觀之曰、夫士業已屈首受書。而不能以取尊榮、雖多亦奚以為。(史記八 列伝1 蘇秦列伝第九 225頁2行目)
- 3 聞燕昭王以子之之乱而齊大敗燕、燕昭王怨齊、未嘗一日而忘報齊也、燕国小辟遠、力不能制、於是屈身下士、先礼郭隗以招賢者。史記九 列伝2 樂毅列伝第二十 230頁4行目)

1の「屈」の主体は諸侯で、対象は遊説者である。諸侯に飾らない言葉で説いたら、不知の者の言として、その勢いは止められ、抑え込まれるし、派手な言葉で説いたら、話が長いとされるといふ内容である。ここでの「屈」の意

味は、「勢いを挫く」で、相手の勢いを抑え込むことである。2の「屈」の主体は、蘇秦で、対象は首である。たとえ、首を曲げ、自分をへりくだらせて、書を読んでも、榮譽を得ることができなければ、たくさん書を読んだ甲斐がないという内容である。ここでの「屈」は、「曲げる」という意味である。3の「屈」の主体は、燕の昭王で、対象は自分の身である。燕は小国で、斉を討つために、国王自ら身を屈めて賢者を招いたというのである。ここでの「屈」は、「曲げる」という意味である。

次に、自動詞の例を挙げる。

- 4 先王悪其乱、故制礼義以養人之欲、給人之求、使欲不窮於物、物不屈於欲、二者相待而長。(史記 書 卷二十三 礼書第一 史記四 八書 9頁4行目)
- 5 白虹屈短、上下兌者、下大流血。(史記 書 卷二十七 天官書第五 史記四 八書 188頁11行目)
- 6 情見勢屈、曠日糧竭、而弱燕不服、齊必距境以自彊也。(史記十 淮陰侯列伝第三十二 127頁2行目)
- 7 且礼義之敝、上下交怨忘、而室屋之極、生力必屈。(史記十一 匈奴列伝第五十 453頁9行目)

4の「屈」の主体は物である。昔の王は、物が人の欲求によって欠乏しないようにしたという内容である。ここでの「屈」の意味は、「勢いが挫ける」の意味であろう。物の勢いが人の欲望によって挫かれるという意味であろう。物の勢いが、人の欲によって抑えつけられ、勢いがそがれ、衰えるのである。ここでの、「屈」は、「不足する」という意味のような、数を視点とした、単なる需用と供給の関係が不均衡であることを意味しない。5の「屈」の主体は白虹である。白虹の勢いが挫けて、短い状態だと、その下では流血の事態が生じているという内容である。ここでの

「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。6の「屈」の主体は軍の勢いである。軍が疲弊しているので、燕に遠征しても、長く戦うことはできないだろうというのである。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。7の「屈」の主体は生力である。漢では、宮殿の部屋を飾り立てるために、生きる力の勢いが弱まっているというのである。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。

『史記』での他動詞の「屈」は「勢いを挫く」「曲げる」の意味で使われ、自動詞の「屈」は「勢いが挫ける」の意味で使われている。これらの「屈」の意味は、日本の上代の歴史書である『日本書紀』の「屈」の意味と一致しているとみてよからう。

四—二 『漢書』の用例から

まず、他動詞の例を挙げる。なお、『漢書』の用例検索は、「中央研究院 漢籍電子文獻」^[1]によって行い、本文は『和刻本正史 漢書』^[2]によった。

- 1 蚡以肺附為相、非痛折節以礼屈之天下不肅。(漢書2 卷二十二 食貨志第四上 585頁下左2行目)
- 2 武謂惠等、屈節辱命、雖生何面目以歸漢、引佩刀自刺。(漢書2 卷二十四 李廣蘇建伝 606頁上右7行目)
- 3 单于怖駭交臂受事屈膝、請和。(漢書2 卷二十七下 司馬相如伝 633頁下右9行目)
- 4 天子哀閔单于棄大國屈意康居、故使都護將軍來迎单于妻子。(漢書2 卷四十 傳常鄭甘陳段伝 740頁下右10行目)

用例1の「屈」の主体は蚡で、対象は、血気盛んな諸侯の気持ちである。蚡は生まれつき体が弱かったので、礼節で諸侯の気持ちを抑かなければ、彼らは従わないと思ったという内容である。ここでの「屈」の意味は、「勢いを挫く」と考えてよい。用例2の「屈」の主体は蘇武で、対象は節である。武は、単于に屈服させられそうになったので、自らの節の勢いを挫いて、命をながらも不名誉となると、自殺を図ったという内容である。武は、自らの使者としての礼節の勢いを挫き抑えたのである。ここでの「屈」の意味も、「勢いを挫く」と考えてよい。用例3の「屈」の主体は単于で、対象は自分の膝である。匈奴が。天子の勢いに押されて、膝を折り曲げて、和睦を願ったのである。ここでの「屈」の意味は、「曲げる」という意味である。用例4の「屈」の主体は単于で、対象は単于自身の意である。陳湯は、単于を屈服させるために進軍し、大国支配のために困苦している単于を哀れみ助けるために、単于を迎えにきたと述べたという内容である。ここでの「屈」の意味は、「勢いを挫く」である。

このように、『漢書』の他動詞「屈」の意味は、「勢いを挫く」と「曲げる」の二種類が認められる。「膝」のように具体物を対象とするときには「曲げる」になり、気持ちや礼節のような抽象的概念を対象とする場合には「勢いを挫く」という意味になる。もともと、この「曲げる」と「勢いを挫く」の意味は、完全に異なる意味ではない。勢いのある気持ちや、固い礼節を押さえつけ、曲げた状態にするというのが「勢いを挫く」であるから、「挫く」の意味は、「曲げる」の派生的な意味である。

次に、自動詞の例を挙げる。

5 生之有時而用之亡度、則物力必屈。(漢書1 卷二十四上 食貨志第四上 278頁上左3行目)

6 暴兵露師常数十万、死者不可勝数僵尸滿野、流血千里、於是百姓力屈、欲為乱者十室而五。(漢書1 列

伝 卷十五 蒯伍江息夫伝 543頁上右7行目)

7 漢征匈奴招四夷天下費多財用益屈。(漢書2 列伝 卷二十 張馮汲鄭伝 572頁下右7行目)

用例5の「屈」の主体は、物を生産する力である。物の生産には時間がかかるのに、それを考えずに消費を進めると、物を生産する力は必ず衰えるという内容である。ここでの「屈」は、「勢いが挫ける」と考えてよい。つまり、上から押さえつけられて、勢いが弱まるというのがここでの「屈」の意味であろう。用例6の「屈」の主体は百姓の力である。秦の国王は、万里の長城を築き、兵を常駐させ、戦いは絶えなかつたので、民は疲弊し、十人のうち五人は乱を起こそうと考えたという内容である。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」と考えてよい。つまり、圧力がかかり、勢いが弱まるというのがここでの「屈」の意味であろう。用例7の「屈」の主体は国の財である。漢は、遠征したり匈奴を招いたりして、国費を多用し、財政力が弱まったという内容である。ここでの「屈」も、「勢いが挫ける」と考えてよい。つまり、圧力がかかり、勢いが弱まるというのがここでの「屈」の意味であろう。

『漢書』における自動詞「屈」の意味は、「勢いが挫ける」である。主語は、物力や百姓の力、財政力といった力と関わっている。これらの力が、何らかの理由によって「挫けて勢いが弱まる」というのが、自動詞「屈」の意味である。

このように『漢書』の「屈」の意味は、他動詞の場合、気力や礼節のような抽象的事象を対象にとるときは、「勢いを挫く」の意味になり、対象が膝のように具体的事象になると、「曲げる」の意味になる。一方、自動詞の「屈」は、心や国力などの抽象的事象が主語となり、それらの勢いが弱まること、つまり「勢いが挫ける」ことを意味する。

これは、『史記』の「屈」の意味と同じである。

四一三 『文選』の用例から

まず、他動詞の用例を挙げる。なお、『文選』の用例検索は、『国訳漢文大成』¹³⁾を、通読する方法で行った。用例は、『新釈漢文大系』¹⁴⁾によった。

- 1 出申威於河外、何猛氣之咆勃。入屈節於廉公、若四体之無骨。(卷五 西征賦 文選上66頁6行目)
- 2 蒼鷹贄而受縲。鸚鵡惠而入籠。屈猛志以服養。(卷七 鸚鵡賦 文選上94頁10行目)
- 3 彊禦亦不干、屈節邯鄲中。俛首忍廻軒。(卷十一 覽古詩 文選中21頁4行目)
- 4 屈心而抑志兮。忍尤而攘詬。(卷十六 離騷經 文選中122頁17行目)
- 5 王師首路、威風先逝、百城八郡、交臂屈膝。(卷十八 册魏公九錫 文選中148頁5行目)
- 6 在昔晦明、隱鱗戢翼、博通群籍、而讓齒乎一卷之師、劍氣陵雲、而屈迹於萬夫之下。(卷十八 宣德皇后令 文選中147頁15行目)
- 7 知天地不可以乏饗、故屈其身。(卷19 勸進表 文選中159頁9行)
- 8 昔武始迫家臣之策、陵陽感鮑生之言、張以誠請、丁為理屈。(卷十九 為褚諮議秦讓代兄襲封表 文選中167頁19行目)

1の「屈」の主体は藺相如で、対象は節である。藺相如は国外では意気盛んであったが、国内では、争いを避けるために廉頗に節操の勢いを挫いて、恭しく接したというのである。ここでの「屈」は、「勢いを挫く」という意味である。2の「屈」の主体は蒼鷹で、対象は猛志である。鷹は獍猛であるためにひもにつながれ、猛気の勢いを挫いて、

人に飼われるというのである。ここでの「屈」の意味も、「勢いを挫く」である。ここでは、鷹の本来の勇猛な気が挫かれて、人に養われる状態をいう。3の「屈」の主体は藺相如で、対象は節である。藺相如は、国内の争いを避けるために、廉頗將軍に対して、自らの節操の勢いを挫いて、堪えて、車を遠回りして、廉頗と戦いを避けたというのである。ここでの「屈」も、「勢いを挫く」という意味である。4の「屈」の主体は屈原で、対象は屈原の心である。屈原は、清く高潔な心の勢いを挫いて、追放の恥辱を払いのけるというのである。ここでの「屈」も、「勢いを挫く」という意味である。5の「屈」の主体は百城八郡の諸侯で、対象は膝である。ここでの対象は、膝という具体物で、「屈」の意味は、「曲げる」である。官軍の威風によって、諸侯が膝を曲げて恭順の気持ちを示したという内容である。6の「屈」の主体は天子で、対象は剣気である。かつて、天子は群籍に博通していても一卷に通じている師に譲り、剣気が盛んで雲を凌ぐ勢いであっても、その気の勢いを挫いて、万夫にへりくだったという内容である。ここでの「屈」の意味も、「勢いを挫く」である。7の「屈」の主体は天子で、対象は身である。祭礼の重要性を知っていて、神前でその身を曲げて、奉祀するという内容である。ここでの「屈」の意味は、「曲げる」である。8の「屈」の主体は丁鴻で、対象は自らの理である。丁鴻は鮑駿の言に感激して、自分の理の勢いを挫いて、国に帰ったという内容である。ここでの「屈」の意味は、「勢いを挫く」である。

このように、他動詞の「屈」の対象は、「節」「猛志」「迹」「理」といったような、抽象的な事柄をとる例と、「膝」「身」のような具体的な事柄をとる例とがある。「屈」の対象となる抽象的な事柄は、心の状態を表す語や行跡である。しかもその心や行跡は、いずれも、勢いがあり、血気盛んな状態である。その勢いを挫いて、勢いを弱めるというものが、他動詞「屈」の意味である。また、勢いを挫き弱める原因は、他者の力による例は認められず、自らの意志によって強い心、高い志をあえて抑えるという内容である。したがって、「屈」の状態も、弱弱しく卑屈で惨めな状態に質

を変えるのではなく、なお強さや高潔さを留めている。質を変えず、勢いのみを挫き弱めるのが「屈」である。一方、対象となる具体的な事物としては「膝」などの、身体部位が多い。これらは、相手に対する恭順の意や尊崇の意を示す行為として共通している。

次に、自動詞の用例を挙げる。

- 9 或曲而不屈。或直而不倨。或相凌而不乱。或相離而不殊。(卷9 琴賦 文選上 126頁5行目)
- 10 途秦命屯、恩充報屈、有悔可悛、滯瑕難拂。(卷10 応詔讌曲水作詩 文選中 15頁5行目)
- 11 若使羽位承前緒、世有哲王、一朝力屈、全身從命、則楚廟不墮。(卷19 為吳令謝詢求為諸孫置守家人表 文選中 161頁9行目)
- 12 今又接之以西夷、百姓力屈、恐不能卒業。(卷22 難蜀父老 文選下 52頁15行目)
- 13 仲翔高亮、性不和物、好是不群、折而不屈。(卷24 三国名臣序贊 文選下 82頁19行目)
- 14 亦各並時而榮、咸濟厥世而屈、説者尚何称於後、而云七十二君哉。(卷24 文選下 封禪文 84頁1行目)
- 15 然周以之存、漢以之亡、夫何故哉。豈世乏囊時之臣、士無匡合之志歟、蓋遠續屈於時異、雄心挫於卑勢耳。(卷27 文選下 五等諸侯論 124頁14行目)
- 16 是以三晋之強、屈於齊堂之俎、千乘之勢、弱於陽門之哭。(卷28 文選下 演連珠五十首 132頁19行目)

9の「屈」の主体は、旋律である。旋律の勢いが挫けても、卑屈にならず、あるいはまっすぐでも、心驕らないというのである。ここでは、旋律を、人心に譬えて表現しており、「屈」とは、心が挫けた状態をいうのである。こ

こでの「屈」の意味は、「勢いが挫ける」であろう。「曲」が「直」と対応し、「屈」は、「偃」（おごる）と対応している。10の「屈」の主体は報である。恩は充ちあふれるほど戴いたが、その報いは意のままにならず、心の勢いが挫けるといのである。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。11の「屈」の主体は楚の国力である。楚が、漢に敗れたのち、身を全うし、漢の命令に従っていれば、漢の廟は滅びることはなかったであろうという内容である。ここでの「屈」は、国の勢いが相手によって挫かれるということを表すから、「屈」の意味を、他の例と同じように「勢いが挫ける」としてよいであろう。12の「屈」の主体は漢の人民の気力である。天子は、西夷を征服しようとしているが、人心の勢いは挫け、恐らくは成功しないであろうというのである。ここでの「屈」は、人民の気力が、度重なる兵役によって挫けるとい内容であるから、「屈」の意味を「勢いが挫ける」と考えてよいであろう。13の「屈」の主体は仲翔である。仲翔は、人に同調することができない性格で、人からやり込められても、心の勢いが挫けることはなかったという内容である。したがって、ここでの「屈」の意味は、「勢いが挫ける」であろう。14の「屈」の主体は、各時代の為政者である。彼らが、一世一代の栄えだけで絶えたならば、かつての泰山の封禪の儀式を称えることはしない。泰山での封禪の儀式は、靈験あらたかであるからこそ、今、私は陛下にそれを勧めるのであるという内容である。ここでの「屈」は、一世一代で政道が絶えることを表しているが、政道の勢いが挫け、その後、衰退するという意味なので、「屈」の意味は「勢いが挫ける」と考えられる。15の「屈」の主体は諸侯である。漢が滅んだのは、有能で強い心を持った諸侯がいなかったからではなく、時代の異なりによって、大きな勲功を挙げても徴用されず、心の勢いが挫けたからだという内容である。ここでの「屈」は、心の勢いが挫けて、勢いが弱くなることを表しており、「勢いが挫ける」という意味であると考えられる。16の「屈」の主体は晋である。強い力を持った晋が斉を併合しようとしたとき、斉の宴席で国王を家臣にまもられ、計略を遂行しようという心の勢いが挫かれてしまった

という内容である。ここでの「屈」の意味も、「勢いが挫ける」である。

以上、自動詞の「屈」の意味を、例を挙げてみてきたが、すべて「勢いが挫ける」の意味である。また、主体としては、例9、10、12、13、15、16のように、その多くが、心である。他には、用例11のように国力が主体となる例や、14のように政道の勢いが主体となる例もある。「屈」は、勢いのあつた主体が、力が加えられてその勢いが弱まることを表す場面で使われている。

このように『文選』の「屈」の意味は、他動詞の場合、心や節のような抽象的事象を対象にとるときは、「勢いを挫く」の意味になり、対象が膝や身のように具体的事象になると、「曲げる」の意味になる。

一方、自動詞の「屈」は、心や国力などの抽象的事象が主語となり、それらの「勢いが挫ける」ことを意味する。したがって、『文選』の「屈」の意味も、『漢書』や『史記』と同じである。

五 中国仏典における「屈」

先に、古文書の「屈」の意味について、他動詞の意味としては、「腰を曲げて、うやうやしい態度で招く」という意味で、僧侶を対象にとる例が多く存することを述べた。古事記にも、「屈請」の形で、「招く」という意味を表す例が存した。漢籍には、『漢書』、『史記』、『文選』を見る限り、「屈」に「腰を曲げて、うやうやしい態度で招く」という意味で使用された例は見られない。そこで、ここでは、仏典について、「屈」の例を見ていくこととする。

まず、「屈」を含んだ二字熟語としては、「屈請」と「枉屈」が、多用される。

まず、「屈請」には、次のような例がある。なお、検索は、「大正新脩大藏經テキストデータベース <http://21dzk1>。

u-tokyo.ac.jp/SAT/」に於いた。(二〇一五年四月十八日検索)

- 1 於後時同前屈請吹螺擊鼓七衆俱集其母遂來於座後邊默(根本説一切有部毘奈耶 144)
- 2 我亦不爲婚姻歡會亦不屈請頻婆娑羅王及大臣等(別譯雜阿含經 0100)
- 3 曾聞有一居士信外道法屈請離繫親子及彼徒衆(阿毘達磨大毘婆沙論 1545)
- 4 夏九十日屈請衆僧奉施醫藥(觀無量壽佛經疏妙宗鈔 1751)
- 5 迹創首屈請敷演會宗七衆(續高僧傳 2060)
- 6 嘉時洗三尊於此日又能屈請高德某法師講宣温室洗浴衆僧經一部(法苑珠林 2122)
- 7 某等皆不別之故邀屈請得此四婆羅門至將軍舍齋(法苑珠林 2122)
- 8 附信修虔并與王書屈請弘法闍婆崇爲國師(出三藏記集 2145)

これらの例を見ると、「屈請」は他動詞で、動作の対象は、それぞれ、1「吹螺擊鼓七衆」、2「頻婆娑羅王及大臣等」、3「離繫親子及彼徒衆」、4「衆僧」、5「敷演會宗七衆」、6「高德某法師」、7「四婆羅門」、8「弘法闍婆」である。これらは、僧侶や大臣等、いずれも尊敬の対象である。

なお、これらの「屈請」の意味は、『日本書紀』の「屈請」と同じ、「腰を曲げて、うやうやく相手を招く」という意味であると考えられる。

僧を対象にとる他動詞「屈」については、次に示すように、『大慈恩寺三藏法師伝』に、「体を曲げて拝礼し、うやうやしい態度で僧を留める」という意味で単字の「屈」が使用される。なお、『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝』では、

これらの「屈」を、漢語サ変動詞として訓んでいる。⁽¹⁵⁾

- 9 仍(チ) 一月ヲ屈シ停(メ) テ仁王経ヲ講セシム(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝 卷1 334行)
- 10 乃(チ) 法師(ト)「及」慧性三藏(ト) ヲ屈(シテ)「於」一ノ大乘寺ニ法集スルトキニ彼ニ下乗ノ三藏有(リ)(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝 卷2 217行)
- 11 隣国之(ヲ) 聞(テ) 各(々) 財宝(ヲ) 捨テ共ニ伽藍ヲ建ツ、仍(リ) テ即(チ)、知僧ヲ屈(シ) テ務(メ) シム(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝 卷3 135行)

これらは「留める」という意味で使われており、「招く」という意味ではないが、体を曲げたうやうやしい態度で僧に依頼するという点では、日本の古文書や古記録の「うやうやしい態度で招く」という意味で使用された単字の「屈」の意味と通底する。したがって、古文書や古記録における「うやうやしい態度で招く」という意味の「屈」は、本邦で生じた意味というわけではなく、中国の仏典で使われた「屈」にすでに存した意味であることになる。ただし、「うやうやしい態度で招く」という意味に「屈」字の動詞としての使用を限定している日本の古文書や古記録の特徴は特筆すべきである。また、日本の古文書や古記録に特徴的にみられる「うやうやしい態度で招く」の意味は、漢籍ではなく仏典から取り入れたということも注目される。日本の古文書や古記録は、寺社に関する内容が多く、また、差出人や受取人も僧侶であることも多い。おそらくは、古文書や古記録に見られる「屈」の意味は、中国仏典を学んだ僧侶によって、「うやうやしい態度で僧を留める」という仏典の「屈」の意味をもとに、日本風に意味を変化させたものである。

一方、漢籍や中国仏典にみられる「曲げる」「勢いを挫く」という意味の他動詞「屈」は、古記録や古文書には積極的には取り入れられなかった。これは、他動詞「屈」が「曲げる」「勢いを挫く」「招く」といったような複数の意味を表すことの、文書の内容解釈上の混乱を避けたためではないかと考えられる。

六 漢字「屈」とサ変動詞「屈す」(くんず)との意味的關係性

さて、わが国における「屈」の受容については、今後の課題としなければならぬところが多くあるが、日本の和文に取り入れられた「屈す」について、若干、触れておきたい。「屈」を読みとして捉える場合と、語として捉える場合とは、本質的に異なり、両者を比較することは注意を要するが、漢語サ変動詞の「くんず(屈す)」が、「屈」字の意味のどのような側面を捕えて発生したのかを考えるために、表記としての漢字「屈」と、語としての「くんず」を比較することは、あながち無謀なこととは言い切れないであろう。

『源氏物語』には、以下のような「くんず」(屈す)の例が30例みられる。¹⁶⁾『源氏物語』の「屈す」は、全て心の状態を意味する。すなわち、恋人や妻との別れや頼りにしてきた人物の死によって、心が沈んだ状態を表わす。

- 1 夕暮となれば、いみじう屈したまへば (若紫 249⑧)
- 2 二三日内裏にさぶらひ、大殿にもおはするをりは、いといたく屈しなどしたまへば (紅葉賀 317⑮)
- 3 例の、心細くて屈したまへり。(紅葉賀 333②)
- 4 日ごろになれば屈してやあらんと、らうたく思しやる (花宴 360③)

- 5 我ながらかたじけなく屈しにける心のほど思ひ知らるる。(明石 441^⑫)
- 6 かのる並み屈したりつる気色どもぞあはれに思ひ出でられたまふ。(葵 318^⑬)
- 7 このごろまかてではべるに、いとつれづれに思ひて屈しはべれば(少女 689^⑭)
- 8 いと屈したる名かな、と思ひみたまへり(竹河 1470^⑯)

1は、紫の上が、自分の世話係である尼君を亡くし、将来の不安を覚えている状態をいう。2は、源氏が自分の居所を離れ左大臣邸に泊りに行くときの、紫の上の心の状態をいう。3も、2と同じで、源氏と離れることに對する紫の上の心の状態をいう。4は、源氏と離れた日が続く紫の上の心の状態を、源氏が思い及ぶ例である。「屈す」は、他の例と同様、うち沈んだ心の状態をいう。5は、源氏が、須磨で生活する自分の心の状態を自覚するという内容である。6は、左大臣邸の人々が、葵上の死去によつてうち沈む、心の状態をいう。7は、主上との仲を思い悩む、弘徽殿の女御の心の状態である。8は、「屈したる」が名を修飾している。名とは、ここでは、女房たちが薫につけた「まめ人」というあだ名である。ここでの「屈す」は、名を修飾することから、他の例と異なり、うち沈んだ心の状態を表していないようにもみえる。しかしながら、自分に降りかかる悲運を、まじめに受け止め、沈みがちな心の状態を表す名が「屈したる名」であり、この「屈す」も、心の状態を表しているとみてよかるう。

このように、『源氏物語』の「屈す」は、全て、心の状態を表現しているとみることができるといえる。心のどのような状態かといえば、「勢いが挫ける」状態である。中国文献に見られるような、「屈膝」などの「屈」が表す「曲げる」の意味は、漢語サ変動詞「くんず(屈す)」には認められない。また、「屈僧」のような、「うやうやしい態度で招く」の意味を表す「屈」も見られない。『源氏物語』の「屈す」は、中国文献の「屈」の意味では、自動詞の「勢いが挫

ける」の意味のうち、心を主体とした「挫ける」の意味に近いと言えよう。

「屈」が漢語サ変動詞化した「屈す」は、古記録や古文書の「屈」とは区別しなければならぬことは確かである。それは、古記録や古文書の「屈」の読み方が今のところ、特定できていないからである。「屈」が、色葉字類抄に掲載された訓である「クジク」「マグ」「カガム」等の和語動詞で読まれていたとすれば、「屈す」とは別語扱いにすべきで、単純に比較することはできない。ただ、漢語サ変動詞「屈す」の意味も、「クジク」「マグ」「カガム」と読まれる「屈」の意味も、漢字「屈」の字義の影響を受けていることは確かである。先に挙げたような「源氏物語」にみられる「屈す」が、どのようにして成立したかについては今後の課題であるが、『源氏物語』の「屈す」が、全て自動詞として使われ、心の状態を表す意味を表わし、「勢いが挫ける」に近い意味であることは、『源氏物語』にみられる「屈す」の成立過程を考えるうえで、注目される。『源氏物語』の「屈す」が、古記録や古文書の「屈」のような「うやうやしい態度で招く」の意味を表さないとことから、『源氏物語』の「屈す」が、僧侶の影響下で、中国仏典の「屈」を基に成立していないということは、少なくとも考えてよからう。「勢いが挫ける」の意味の「屈」が見られるのは、漢籍や中国漢詩である。この点から、和文の「屈す」は、中国仏典ではなく、漢籍や中国漢詩をもとに生まれた語であると想像される。おそらくは、漢籍や中国漢詩の読解から生まれた可能性が高いと思われる。言うまでもなく、漢籍や漢詩の読解と深く関わっていたのは、官吏の登用制度からしても、官吏を目指す学生や、宮廷に仕え、昇進を目指す公家たちであった。おそらくは、『源氏物語』にみられる「屈す」は、漢文の訓読試験によって採用されたり、昇進したりした、学生や博士、公家たちによって、漢籍や漢詩の「屈」の意味をもとにして生まれてきたのではないかと思われる。

今後、漢籍や中国漢詩の「屈」の読み方について、訓点資料を対象に確認し、「屈す」の表現的価値について裏付

けを行いたい。特に、漢文訓読において、「屈す」がどのように現れるかを詳細に検討する必要があるが、この点についても今後の課題としたい。

注

- (1) 『色葉字類抄並びに索引』(中田祝夫 峯岸明編 風間書房 昭和39年)
- (2) 『観智院本類聚名義抄』法下八八(正宗敦夫校訂 風間書房 昭和45年)
- (3) 『新訂 字統』(白川静著 平凡社 平成19年 初版第四冊)
- (4) 『古事記総索引』(索引篇 本文篇 昭和49年 高木市之助 富山民蔵編 平凡社)により検索。
- (5) 『日本書紀総索引』(中村啓信編、角川書店、昭和46年)により、検索した。
- (6) 『新編日本古典文学全集』日本書紀①～③(小島憲之 他校注 平成8年 小学館)により、用例を示す。
- (7) <https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/index.html>
- (8) 拙稿「上代における動詞『怨』『恨』の意味用法」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢第18号』(二〇一五年三月)では、『古事記』『日本書紀』といった歴史書と、『万葉集』という和歌とでは、「恨」「怨」の意味に違いがあることを示し、それが、中国の歴史書『史記』や『漢書』と詩文『文選』における「怨」「恨」の意味の違いと合致することを述べた。このことは、文章ジャンルによって、漢字の取り入れ先も異なることを示唆する。
- (9) <http://hanji.sinica.edu.tw/>
- (10) 『史記四(八書)』(『新釈漢文大系41』吉田賢抗著 平成7年 明治書院)、『史記八(列伝二)』(『新釈漢文大系88』水沢利忠著 平成2年 明治書院)、『史記九(列伝二)』(『新釈漢文大系89』水沢利忠著 平成5年 明治書院)、『史記十(列伝三)』(『新釈漢文大系90』永沢利忠著 平成8年 明治書院)、『史記十一(列伝四)』(『新釈漢文大系91』青木五郎著 平成16年 明治書院)
- (11) <http://hanji.sinica.edu.tw/>
- (12) 『和刻本正史 漢書』(古典研究会 汲古書院 昭和47年発行)
- (13) 『国訳漢文大成 文選上 中 下』(大正11年再版発行 国民文庫刊行会)

- (14) 『新釈漢文大系文選』 明治書院 一九六三
- (15) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』(一九六七年 東京大学出版会) による。
- (16) 『源氏物語大成』により、用例を検索した。